

## 平成30年度第2回四万十町文化的施設検討委員会会議録

日 時 平成30年 8月 5日(日) 10:30~12:20

会 場 四万十町役場本庁 東庁舎1階 多目的大ホール

出席委員 内田純一、谷口和史、林 一将、山本哲資、高垣恵一、池田十三生  
田邊法人、下元洋子、酒井紀子、刈谷明子

欠席委員 林 伸一、川添節子、青木香奈子、友永純子、中平浩太

事務局 川上哲男教育長、熊谷敏郎教育次長

生涯学習課(林瑞穂課長、味元伸二郎副課長、森山典将主幹、松田佐穂主任)

大正地域振興局(佐々木優子課長)十和地域振興局(酒井弘恵課長)

図書館・美術館(長木千葉美、谷脇八代美、山口 香、山地順子、井上千紗)

企画課(大元学副課長兼まちづくり推進室長、西尾洋亮主査、竹村俊斗主事)

ARG(岡本 真、下吹越香菜)

### 1 開会

(事務局)

おはようございます。暑い中お疲れ様です。

ただ今から平成30年度第2回の文化的施設検討委員会を始めたいと思います。よろしくをお願いします。

それではさっそく議事に入りたいと思います。委員長、よろしくお願いします。

(内田委員長)

はい。皆様、おはようございます。

前回は5月で少し間が空いてしまいました。その間に酒井さんと刈谷さんのお子さんもぐんと成長したことを実感するわけですが、

成長という点では、私たちが作っていく図書館も、作るだけではなく育てていく、成長していくというところが大変大事だと改めて思います。

皆さんご存知のように、7月24日に高知市のオーテピアが開館しましたが、先だってそこに行った時に、小学生が来ておまして、その子が「ぼくはね、ここに住みたいんだよ」と話しているのを聞いて、とても私は嬉しくなりました。「ここにずっといたい」という気を持ってくれるような所をぜひ四万十町でも目指していきたいですね。オーテピアとこことの規模は違いますので、それにしろと言っているわけではなく、「ここに住みた

い」というような言葉がどんどん増えていくようなことが大事じゃないかなと思っています。

また、梶原もオープンしたので私も何度か行きましたが、行くたびに段々と地域に溶け込んでいくような感じがします。あそこの前の広場も、保育園と一緒にやりながらとてもいい空間を生み出していると感じました。

翻って我々は、瀬戸内市の図書館をみんなで見に行ったわけですが、あれを思い出しますと、本当に明るくて市民の憩いの広場になっているなど。小さい子からお年寄りまで、そして高校生も一生懸命あそこで勉強して、多様な使い方でみんなが生き生きしている姿を見てきました。瀬戸内市で大事なものは、やはり多くの人の意見を聞いて、ある程度の時間もかけながらしっかり作ってきたということも学ばせていただきました。

やはりここでも、どれだけ多くの人の意見、そして自分たちの施設だという参加・参画の機会、条件をどういうふうに整備しながら作っていくかということ瀬戸内から学ばせていただいたことを改めて感じています。

併せて先だって6月、山本委員にもご尽力頂いて、中西繁先生のお話を伺う機会がありました。これも実はこの文化施設のコンセプト、基本的な考え方をどういうふうにしていくかというところで大変大事なお話を頂けたと思うんです。文化の持っている力とはどういうものだったかという話だったと思うんですね。もっと言えば、やや哲学的でしたがその根源に人間というものがあって、そういうところからの大事さ・必要性を強調されていて感銘を受けました。文化や人間といいますとやっぱり生活・日常が非常に関連づけられます。この施設を建てる上でも、そういった点も大事にしていきたいと思ひますし、だからこそ多くの人の意見や参画の機会を持ちながら作っていくのが大事だと改めて感じております。

間は空いてしまいましたが、私たちがやってきたことは、ある程度その方向はあったんじゃないかと思っています。

とはいえ、時間も限られております。町の計画ですし、町のスケジュールや予算等の関係もありますので、多少急がざるをえないことも出てくることもありますが、できるだけ質の高いものを作りたいですので、今後、質とスピード感をもって進めていきたいと思ひます。

のちほどご紹介いたしますが、町民の方たちと一緒にこの施設を作っていく中で、色々な方法を駆使していきたいわけですが、そういうことを全国でずっと続けていच्छるARGの岡本さんに加わっていただき協議を進めていきたいと思ひますので、よろしくお願ひいたします。

## 2 議事

- ・今後のスケジュールについて

(内田委員長)

それでは最初に細かいスケジュールを説明させていただいて、それについての質疑をしたあとに、岡本さんにお話しただいて勉強していきたいと思います。

[事務局から資料「平成 30 年度 四万十町文化的施設検討委員会 年間スケジュール」読み上げ説明]

(内田委員長)

ありがとうございました。

年間スケジュールについてのご説明がありましたが、これについて質問やご意見がございましたらお願いします。

これまでもスケジュールを示しましたがなかなか揃わないということもありました。そこは少し抽象的だったんだらうと思います。今回は具体的に動かしていくことを考えておりますし、そうでなければ基本構想にまとまっていきませんので、こういう形で進めていきながら基本構想につなげていくということなのですが、何かございませんでしょうか。

場合によっては、例えば 4 回から 5 回の間、5 回から 6 回の間を挟むこともありえます。お金との関係もあると言われてしまうかもしれませんが、基本はこのスケジュールでいきたいと思いますが、ある程度、叩き台なりを検討したり作っていくところで、もたざるをえないということがあるかもしれませんが、いいですかね？

[委員から反対意見なし]

(内田委員長)

決まってないところはこれから内容を詰めさせていただくということで、よろしく願います。

それでは次のご説明をいただければと思います。

[事務局から資料「文化的施設整備年次スケジュール予定」の読み上げ説明]

(内田委員長)

ありがとうございます。

施設が開館するのが平成 34 年度を予定した上で、そこから逆算して、どういうふうなスケジュールを立てていくかご説明を頂きました。

(事務局)

補足をしたいと思います。

検討委員会を31年末まで延長することを資料の下でお示ししております。ということで、現在の検討委員の皆様を引き続き、31年度末まで延長していただきたいと考えております。

要綱等また整備して正式にお願いすることとなりますが、延長することでご理解を頂きたいと思います。

それとあと一点。住民ワークショップ4回で回数をお示ししておりますが、年間スケジュールの中ではその4回に届いておりませんが、今後委員の皆様が必要であるとか、中高生のワークショップが必要であるところご提案がございましたら、ワークショップなり勉強会なり、正式な検討委員会の形にとらわれずに、自主的参加も含めて、事務局でも調整していきたいと思っていますので、合わせてよろしくお願いたします。

(内田委員長)

ありがとうございました。

住民ワークショップ4回とありますが、それもかかり決まっているわけではなくて、私たちの中で必要があればやってみることができるご提案がありました。

それから検討委員会を31年度まで延ばしたいので、引き続き委員の方にはお願いしたいというご提案が加わりましたが、いかがでしょうか？

[全委員から反対意見なし]

(内田委員長)

例えば「施設整備位置の決定」「運営方針の決定」は、決定の権限がこの委員会にあるのかが実は大変大きいこととして、おそらく無いんだろうと思いますが、その辺はいかがですか？ こちらの構想で、「ここが位置」と基本構想で出せるものなのか。まだ分からないのでしたら分からないと言っていただいてもいいんですが。その辺りいかがでしょうか？

(事務局)

検討委員会については、施設整備とあり方についての検討委員会を31年度末まで延長するということといたしまして、施設サービス検討委員会については、また別の組織として起ち上げる方がよいのかなと事務局では考えております。

31年度末までの検討委員会と、32年度以降の検討委員会についてはあくまでも別物ということでご理解をいただければと思います。委員の皆様、引き続きやっていただける方もいるかもしれませんが、別物と考えております。

(内田委員長)

ありがとうございます。

それで、どこに建てるかという位置はこの委員会で決められるわけではないし、もう少し大きく言えば、基本的に文化施設を建てるか建てないかは条例設置によりますし、議会の承認が要りますよね。

議会でこのことが話題になりゴーサインが出るのが当然の仕組みであるわけで、ですのでそういうことを踏まえておくということが必要だということですね。

ですからなおさら、住民の意見を多く取り入れるとか、たくさんの人に参加していただくといった時に、議員や役場で働く人も当事者意識を持っていただきながら参加していただくという流れが上手く出来れば、ぐーっとそこまで出来てきたのにそこでぼしょってしてしまうことは比較的少なくなるはずなんですけど。

そんなことを頭に浮かぶようなスケジュール感があるので、そういうイメージを持っておく必要があるかなと感じた次第です。

例えばこの施設の位置に関しては教育委員会だけで決められるものでもないですし、色々な思惑があって、他の県内の自治体でもそういうことがあったわけですし、なかなか難しいことではあるんですが、どこに建てるかは置いといたとしても、要はいい文化施設を作りたいというところで、(資料の) 緑色の部分とワークショップとのスケジュールとのことで考えておいたらいいかなと思いますけど、よろしいですか？

[他委員から意見なし]

(内田委員長)

では事務局からご提案を頂いたこのスケジュールで進めていきたいと思います。よろしくお願いたします。

先に事務的なことを確認させていただきました。それでは、今日の午後にまちあるきワークショップをお願いしておりますが、それらに関しまして、今日お見えいただいた ARG の岡本さんからワークショップ等の説明と、ARG がどのようなことを考えていらっしゃるのかを説明する時間を取らせていただきたいと思います。

・ワークショップの説明等

(ARG 岡本)

それでは改めて、おはようございます。岡本と申します。

本日は私、岡本と、弊社のスタッフである下吹越と二人で来ております。

まずは簡単に自己紹介をしておきます。アカデミック・リソース・ガイド、業界的には ARG と略称で呼ばれていますが、その会社をやっております。それと先ほどお話しいただいたように、総務省から委嘱を受けて地域情報化アドバイザーを務めています。これは日

本各地における各地域の情報化——地域の無線 LAN を使えるようにしようとか、SNS を使った情報発信を強化しようだとか、そういったことを、総務省が日本各地に専門家を派遣して、各自治体に助言をするという取り組みを行っておりまして、このアドバイザーを 2012 年から務めております。今回はそのアドバイザーの立場でここに来させていただいています。

その他色々やっているんですが、当年 45 歳でして、1997 年に大学を卒業して現在に至っております。もともと編集者をやっていましたが、インターネットの台頭を非常に感じたので、大学を出て 2 年目の 1999 年に、当時設立されて間もないヤフージャパン株式会社に転職しまして、以来 10 年間、インターネットのサービスを作るという仕事をしておりました。検索したり調べ事をしたりするサービスを一貫して手掛けてきました。おそらく皆様が一番知られているのは「Yahoo!知恵袋」ではないかと思います。もともと会社は 10 年で辞めようと思っていましたので、10 年経ったところで自分の会社を作りました。

現在弊社はスタッフが 8 人ほどおります。最近男性が増えてきた傾向がありますが、全般的には女性が非常に多い会社です。

私たちの仕事を分かりやすく言えばコンサルタントになります。私たちが非常に大事にしている・拘っているのは、日本の隅々の至る所まで自分たちの足を運ぶこと、そこでの生活や暮らしぶりをつぶさに見ることだと思っています。

私たちの会社は神奈川県横浜にあります。実際ほとんど外に出ていることが多いです。

これは例えば昨年、私が移動した距離ですが（※プロジェクターに地図表示）、1 年間で大体 10 万キロくらい移動して暮らしています。昨年ですと 1 年間で 43 件くらい回っています。

私たちが仕事をしている中で一つ、これだけは負けないだろうと誇りにしているのは、図書館をはじめとする、日本全国にある文化施設をとにかく隈なく見て回っているということです。

例えば今まさに、この町で作ろうとしている図書館。全国 1700 の自治体の中で、公共図書館の数は 3200 館とされています。私はその内 2000 館くらいまで行ってまして、多分私を超える記録を持っている人はいないはず。死ぬまでに全自治体と全図書館を回るのを心がけています。

本題に入る前にもう少し。図書館を作るという仕事をしているんですが、今ここ（※スクリーン）に列挙してあるのが、今まで私たちが関わってきた、ないしは現時点において関わっている自治体です。太字になっているのが町村ですね。赤字が現在進行中のもの、黒字は図書館が開館したもの、またはもうすぐ開館するもの。高知県内だと今何かと話題の土佐町の図書館。町長も教育長以下も教育をもっとちゃんとやっていく上で図書館をしっかり作っていこうということで、土佐町のアドバイザーなどもしております。

ご覧いただいて分かるように、比較的、町村の仕事を多くやっています。どちらかとい

うと大きな自治体はなるべく避ける傾向にある。

実際に私たちが関わってきた施設をいくつかご紹介したいと思います。

- ① 沖縄県恩納村「恩納村文化情報センター」
- ② 大分県日出町「日出町立図書館」
- ③ 富山県富山市「TOYAMA キラリ」
- ④ 岡山県瀬戸内市「瀬戸内市民図書館」
- ⑤ 沖縄県沖縄市「沖縄市立図書館」
- ⑥ 宮城県気仙沼市「気仙沼図書館」
- ⑦ 福島県須賀川市「須賀川市立図書館」
- ⑧ 宮城県名取市「名取市立図書館」
- ⑨ 島根県西ノ島町「西ノ島町コミュニティ図書館」(ARG 下吹越担当)

四万十町での仕事は、担当スタッフに下吹越を付けているのはそこに理由があります。こういった中山間地域は、我々にとっては大きな仕事の経験より、こういう地域の方々と徹底した話し合いをしながら進めてきたプロジェクトの経験が物を言うかなと思います。下吹越は西ノ島町に入れ込みまくりで、町内のスナック・飲み屋を制覇し、島では「かなちゃん」と呼ばれて、既婚者でなかったら確実に嫁に来いと言われてるでしょう。ただ、こういったところが我々の強みと思っています。

さて、今回私たちの提案しているワークショップの進め方について説明させていただきたいと思います。

#### [ARG 側の映像資料観賞]

#### (ARG 岡本)

今ご覧いただいたのは大分県別府市のものです。これがこの四万十町の計画とよく似ていて、図書館と美術館をセットで一つの施設に建て替えるという計画が進んでいまして、その時の計画策定のワークショップを行った模様です。せっかくなので3回やったワークショップの3回に動画撮影班を入れて、都合10時間分の映像を今の数分に圧縮してもらいました。なんとなく雰囲気分かるかなと思います。

今回こういったワークショップをやっていきたいと思っているわけですが、今まで多分、行政職員の方は元より町民の方々も、もしかしたら庁舎や施設を整備したりする際、ワークショップに参加した方もいらっしゃるんじゃないかと思っています。

ただ、一つだけ、私たちがワークショップの中で大事だと思っているのは、行政の方がいる前で言うのも何ですけど、往々にしてあるワークショップというのは、「とりあえず住民に何か言わせておけ」、つまりガス抜きさせておけばいい、という発想が行政側に

はよくよくあるんですよね。でもそれはやっぱりまずいと私たちは思っています。

同時にこういうのも困ると思っています。住民の方々が言いたい放題、行政に対する要望の会になる。それも多分違うと思っています。

私たちが多くの自治体で仕事をしてる中で感じるのは、「この自治体は生き残る」「この自治体は終わる」ということ。実際 1700 自治体がありますが、夕張市のようなケースもあり、これから 20 年くらいのうちに、現実的に破綻する自治体、もっとひどいのは人が住まなくなる自治体がこれからどんどん出てくると残念ながら予想されています。その時にルールを決めていかねばならないと思っています。

今まで成長していた時代は、お役所に文句言いつつ、お願い事をすればそれでなんとかなってきました。成長の時代はそれでよかったのですが、これから我が国、めちゃくちゃ厳しくなることは目に見えています。

例えば私、1973 年生まれで 45 歳です。1973 年って第二次ベビーブーム世代の頂点なので、同世代が 200 万人以上います。私の両親が 1944 年・1945 年生まれです。いわゆる戦時中の、第一次ベビーブームですね。その世代が日本史上、最も同世代が多いです。ただし戦中世代とは早くして亡くなっている方が多いので、実質的に生きている同世代が一番多いのは私の世代ですね。

私の生まれ育った時代は多分良かった時代で、子どもの数もバンバン増えますから、学校もバンバン建てる、図書館も作る、公民館も作ると、自分の成長と共に様々な文化施設・公共施設が整ってきた時代です。

ところが今の 18 歳、今年大学に入った子どもたちは 100 万人ちょっとです。なんとわずか一世代の間に人口が半分になっています。

そして、そこに幼子たちがいますが、あの子たちの世代は何と同世代人口が 100 万人を割っている。日本の少子化の問題とは実はここにありまして、人口が減ること自体は別に悪いことではないんです。むしろ 150 年前の日本の人口は 3000 万人です。300 諸侯が 3000 万人を統治した時代が 150 年前の話ですが、わずか 150 年の間に 1 億人増えたわけで、凄まじい増え方なんです。別にちょっと減ったって問題はないはずなんです。今問題なのは、減り方が急過ぎる。

子供がとにかく減っている。人口グラフで見るとめちゃくちゃな形になってしまう。申し訳ないのですがそこのお子様たちには私の老後を支えていただくことになるんですけども、多分、一人が 20 人を支えないとシニアが死ぬって世界になってしまう。それが今の大きな問題ですね。

その中でどうやりくりしていくか考えた時にとっても大事なものは、今までのようにお願い型の民主主義では成り立たなくなる、みんなできちんと考えて責任を持って決めていて、決めたことに対してみんなで責任を負う。「役所がしっかりやってないから悪いんだ」「町長がいけないんだ」「議会は何してるんだ」ではもう効かないんです。そう言っても最後に泣きを見るのは住民であると。



これは本当に、夕張市のケースがレポートを出されてますけど、決して他人事ではありません。夕張市の場合は破綻したことによって博物館がなくなり、図書館がなくなり、公共サービスがバンバンなくなり、結果どんどん住民が減り、ここまで来ると回復不能だと思われま。夕張市は今ひっそりとやってるんで知られてないと思いますが、ついに思い切った政策を打ち出して、この辺の感覚で言ったら「十和に人は住んじゃいけません。全員窪川に下りてきてください」というような物凄い政策を執ってます。つまり土地を放棄して、みんなに一か所に集中して住んでもらって、そこにだけ公共サービスを提供するという形になってきてしまっています。

これからそうならないためには、やはりみんなできちんと決め事をしていくということが大事。その中でもこのワークショップがあるんです。

今日また午後にやっていきますが、ワークショップの誤解というのが、今まで話してきた部分を踏まえていただければと思いますが、ただ一方的に自分の意見を主張する場ではないということですね。例えば「図書館作るんだったら蔵書は絶対 20 万冊なければいけない」「オーテピアよりでかい図書館がいい」とかですね、そういうことを個々人が主張する場ではありません。

あるいは、これがまた行政が主導するワークショップでよくありますが、結論自体は決まってる、落とし所はもう見えている、住民をそっちに誘導するワークショップ。残念ながらありますし、実際私たちの会社にそういう依頼をしてくる自治体もあります。もちろん断ります。

ちなみに今回も、役所の方に色々相談して来ますが、全くそんな裏はありません。むしろ好き放題にやってよしくらいに言われているのでこの場合は大丈夫ですが。あらかじめ定められている結論を合意する承認機関でもありません。

そうじゃなくてですね、色々な方々が色々なバックグラウンドを持っている中で、経験もそれぞれ違う中で、みんなでコラボレーションする、協同することですね。みんなで様々な意見を出し合えば、これは先人たちの仕様にふさわしい知恵ですが、「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があります。これ全くその通りで、一人で考えてたら気づかないことってたくさんあります。でも一人集まり二人集まり三人集まり、それが 10 人になり 100 人になれば、もちろん意見はたくさん食い違いますが、多様な気づきが出てきます。

例えば私は子どもがいません。ですので「子どもがいる生活」があくまで想像でしかない。こういう人間だけが図書館を作ろうとすると、「授乳室はあったほうがいいな」とそこで終わるわけです。でも果たして授乳室があれば働くお母さんたちみんな救われるか？多分違いますよね。さらに言えば、授乳室、つまり「お母さんが子どもを世話する部屋があればいい」という発想がかなり男性目線です。いいいやそれ、男性もやれよ、男性も頑張れよ、ということもあるわけで。それぞれ立場が違う人たちが集まって来ないと気付かないこと、たくさんあるわけです。

ですからこれからやっていくワークショップはあくまでみんなで協同する場だと思っていただければと思います。そうやっていくことによって結局みんな一人一人が主体性を持っていく。みんなで決めつつ、自分たち一人一人がこの町の未来に対して責任を持っていく。ということがワークショップの場だと思っています。だからワークショップで大事なのはみんなで一緒のことをすること。思いを共有し合う、伝え合うこと。口に出さない限り、お互い神様ではないので、人が心の内で思っていることなんて分かりません。

これも街づくりの仕事でよくある話ですが、「俺の気持ちを分かってくれ」「忖度してくれ」「読んでくれ」って方がいますが、読めません。必ず言わなくてははいけない。

だからこそころみんなでわいわいがやがやとやることは、実は皆さんの思いをちょっとずつ引き出していくことになるんですが、そうやって思いを伝え合っていく。そして実際に町を歩くことで体を動かして、頭だけで考えない。実際に町全体を見渡してみる。こういったところが、いくつかキーワード入れてありますけど、ワークショップにおいては極めて重要となります。

今回のワークショップの具体的な話といえばですね、大切なのは、単なる合意を作ることではありません。合意を作るとするのは委員会のプロセスだろうと思っています。行政の手続き的に言っても、こういった検討委員会が策定され、検討委員会の中で最終的に基本構想という文書を作り上げていきます。それはこの町にとって重要な行政上の計画として、今後予算がついて、行政が執行していくこととなります。

ワークショップというものは、みんなが主体性を持つ、他人事ではない、役所に任せとけばいい、ではない。あるいは委員会に任せてあるから他は知らないと言われても困りますよね？ 「いやそこまで責任負ってないし」ではなくて、それぞれ多様な関わり方はあっていいんですけど、他人事ではなくて自分たちの暮らしを作っていくことを考える、そのきっかけになるのがワークショップだと思っています。

これをきちんとやっていくと、人任せではなく自分事として、もっと当てて言う「私たち事」ですね。「これはみんなの問題だ」「私一人がよければいいではない。みんなとしてどうするか」。

そしてここで言う「みんな」にはすごく大事な人たちが含まれています。まさに将来世代です。今そこに存在している幼子たちだけではなく、この子たちが父親・母親になった時のことを考えないといけない。その時私たちは死んでるかもしれませんが、50年後100年後にこの町に生まれてくる自分たちの子孫に対して、その人たちのことも考える。自分たちには何ができるかということを考えていきたいと思っています。

大事なのは「他人事じゃない」。自分だけのことじゃなくて、「私たち事」、みんなの問題として捉えること。

そしてあともう一つ。これは協同することによって得られることですが、思い込みをみんなで揺さぶり合いましょう。例えば図書館の議論をしているとどうしても今ある図書館を前提に皆さん考えるんです。「もっと本は多いほうがいいな」とか。確かに今の図書

館はスペースも狭いですし置ける本も限られています。もっとゆったりした寛ぎスペースが欲しい。そして最近非常に多いのは、「スターバックスがあるといい」「カフェがあるといい」、そういった発想ですね。これって特に新しさも何もなくて、新しければいいってものではないですが、なんとなく自分が見知っている図書館のイメージをただ語っているだけなんですね。でもそれはちょっと考えてください。ファッションに置き換えていただければよく分かると思いますが、今流行っているものと、5年後ですよ、4年とか5年後とかに文化的施設が出来るわけで、今最先端のものを「これいいな」と議論したら、施設が出来る頃には「え、ちょっと、あれいいのか?」となってしまいます。そうではなくてもうちょっと先を見ていくためには、自分たち一人一人が考えている図書館・美術館のイメージ、あるいは町の将来のイメージというのをお互いに語り合うことで揺さぶりをかけていく。「あ、そういう考えもあるのか」。

例えば50年くらい経つと電子図書館ってかなり実現していると思われれます。50年後だと先過ぎるかなと思うのでこれが25年後だとしたらどうでしょう？ 新しい施設を作るということは、今、公共施設を新設する際、その施設の利用期間は約50年間と設定されます。これは大概どこの自治体でも一緒です。ですからこれから作る施設を使い続けると考えたら25年後は本が要らないかもしれないんです。

そういったところまで見据えて、思い込みだけに基づかないで話し合っていくのがワークショップのあるべき姿であろうと思います。

さて。あとは全体スケジュール、先ほどお話があった通りですが、とにかく私たちが大事にしたいのは街を歩くことです。文化的施設というハコを作るのに何で町を歩く？と思われる方もいらっしゃるでしょうが、これとても大事です。

とりあえず立派な施設があればそこにばかすか人が来るようになるかということ、そんなことはありません。最初だけ来ます。これはほとんどの日本の図書館に見られるケースですが、1年間の利用者数が最も多いのは開館した年だけです。そのあとはほとんどの施設が右肩下がりで利用者が下がり続ける。しかしその中でも利用者が増え続けるケース、あるいは最初から利用者がすごく来ていてずっとそれが続いていくケースがありますが、それはきちんと地域との繋がり、街との繋がりをよく考えてする、さっき話題になった場所を選ぶこと。そして場所だけではないですね。そこにどんな機能や役割を持たせるのかを地域全体を踏まえて考えているか。これ非常に重要になります。

先ほど紹介した大分県日出町の図書館の場合、JRの駅のすぐ横に設置してあります。これかなり議論しました。なぜかというとい日出町は、高校生が基本的に大分市や別府市に通学するんです。そして日出町は大部分が山奥なので、基本、子供たちは車での送迎があります。この町もまさにそうだと思うのですが。10代の子供たちが帰ってきて、親御さんがピックアップしに来るのに、上手く合流するための待ち時間がかなりあったんです。それこそ、大分といっても冬は相当寒いですから、やはりそれはかなり大きい課題になっていました。その結果、あの施設を作り、1階にショッピングセンターを入れ2階に図書館

が入りました。親と子、どっちが早く来ても、お子さんが早く帰ってきたら図書館で勉強、親御さんが早く来たらショッピングセンターで買い物、そしてあの施設で落ち合ってそのまま帰っていただくということを考えて作ってあります。これがまさに地域の中に繋がりを作るということなんですね。

その地域の中でどういう場所、どういう機能を持つかということは、そのエリアの在り方全体を踏まえて考えなくてははいけません。特にこの窪川の中でとなると、最低限この窪川の街を見なくてははいけない。でも窪川だけを見ればいいわけでは当然ありません。三つの自治体がまとまって一つの自治体になっているので、十和・大正のほうから見た時に、じゃあせめて窪川のどこにあることが望ましいのか。あるいは、大正や十和では実現できないこういう機能をどうやって持たせるのか。そういうことを考えていく上では街を歩くことが非常に重要です。

実際に街を歩くことは今日やろうと思っていましたが、前回来た時にあまりの暑さに恐れおののきまして、せっかく良い形で文化的施設を作るのに万一、熱中症で死者が出たらこの事業そのものが終わると思ひまして、前回に教育長たちと相談しまして繰り延べさせていただきました。9月に実際の街歩きをさせていただきたいと思っています。

本日は午後から、少し私から全体的トークをさせていただいたあと、前回できなかった七夕ワークショップと、次回の街歩きに向けての意見交換会をやっていきたいと思っています。

本当は前回がちょうど7月7日開催予定だったので、みんなで七夕の雰囲気で作るといいなと思ったんですが。旧暦でいえば仙台とかは今まさに七夕シーズンなので、ここだけ今日は気持ち切り替えてですね、笹もご用意いただき見事な飾りつけもしていただいたことですので。

午後は、皆さんが、文化的施設が出来ていったらそこで何をしたいのか、こんなことができたらいいな、5年後に文化的施設が出来たら私はそこでこんなことをしたい、という皆さんの願いを（短冊に）書いていただくというワークショップをやりたいと思っています。

これで大事なのは、これからぜひ委員会の議論でも大事にしていいただければと思います。が、「あれが欲しい」「これが欲しい」という議論をしていると、何も決まりません。それは極めて「お願い型」なんですね。そうでなくて、「何をしたいか」。こういう場があれば私はこんなことができる、こんなことをしたい。そういうふうに語っていくと、皆さん必ず建設的に話し合いができます。

「あれが欲しい」「これが欲しい」だと、私も時々、内心で邪悪な気持ちが渦巻くんですね。内心で舌打ちしながら「自宅でやれ」とつい思うことがあるわけです。例えば「ロッキングチェアが欲しい」、それはさすがに無駄じゃないかと。貴重な委員会の時間を使って何をしてるんだと思ったわけですが。内心「悪くはないけど自宅に置けばいいだろ」と思いました。「何が欲しい」を言い出したら切りがないんですよね。例えば私はこの時

代においてかなり狭く生きてるんですが喫煙者です。私が図書館で一番やりたいのは「煙草を吸える図書館」ですよ。公共図書館でそんなの絶対できないんですが、これをスモーカーでない人が聞いたら「何て傍迷惑な」ですよ。でも結局そういうことなんです。「私がこれ欲しい」と言われても困るんです。それは、自宅でやってください。

そうではなく、「こういうことをしたいんだ」「こういうことができるんだ」。例えば5年後10年後であれば、そこにいらっしゃるお母様方もよりベテランママになっている。そしたら、図書館にこんなスペースがあれば、自分の子育て経験を生かしてより若いママさんたちを助けてあげたい、これであれば、お子さんたちが這いずり回ってちょっとドタバタしてもいいような場所を作るのってみんなのためになるよねって考えていけます。この点を、議論する時に、「何をしたいか」を意識して語っていただければと思います。

あとは次回9月に街歩きをしまして、10月にこれをまとめて、実際にストーリーを作っていきたいと思います。この施設が出来たらこの町にどんな物語が生まれるのか。ある一日を取って見たら、5年後の今日、10年後の今日。文化的施設がもうオープンしていて、ふらっと日曜日の昼下がりに入って行ったらどんな風景が生まれているのか。それをみんなまで描き出したいと思います。

そういう将来の、具体的に実現されていなくてはいけないと皆さんが考える未来図をきちんと文章にする。これをきちんとやっておくと、必ずこの先、施設を作っていく検討をする中で、多分色々なあらがみもありますし、委員の皆さんも迷われることもあると思います。でも「あの時、最初に思ったこの気持ち」をきちんと文章にして物語にしておくと、ブレがなくなります。色々迷ったけれど、やっぱりこれが私たちの選ぶべき町の未来なんだということが見えてくるので、そういったストーリーを作るといっていききたいと思っています。

大変長くなりましたが、私からの説明は以上です。

午後からの参加が難しい方もいらっしゃると思いますが、資料等は教育委員会に渡しおきますので、また見ていただいて。今日の午後にご参加していただけると有難いですし、(参加が)難しい方もぜひ次回以降に参加していただければと思います。

参加の人数は限定数になっておりますが、教育委員会の皆さんは「来るだけどんと来い」「たくさん来てくれるに越したことはない」と思っておりますので、皆さんやご家族、ご友人の方々に行ってみようとお声をかけていただいて、大きな輪にいただければ有難いと思っています。以上です。

・その他

(ARG 岡本)

もしご意見・ご質問等あればお伺いしたいと思います。

(内田委員長)

岡本さん、ありがとうございました。

今お話がありましたが、全体を通して何か、岡本さんに伺ってみたいことがあれば出していただいて。

(酒井委員)

岡本さんの本を最近読ませていただいて、とても参考になったり面白かったり感動したりしました。

自分たちの町仕様で図書館なり設定するとしたら、総合計画を最初にきちんと読み込むべきものだと書いてらっしゃいましたが、私もここに高知市からお嫁に来たものでして、四万十町全体の大きさだとか、四万十町がどのくらい分割されていて、窪川に施設が出来たところを通うのにどのくらいの時間がかかるだとか、そういった体系立ったものが理解しきれなくて。あまりにも取っ掛かりが無さ過ぎて、ちょっと説明しにくいのですが、もう少し委員会の中でもそういった根っこのことを勉強しておかないと。

もともと少ない人数で議論して、結局みんなにとっては利用価値のない所だったとなるのは避けたいので、大まかなことが知りたいと感じています。

(ARG 岡本)

そうですね。全員が全員やるのは難しいですが、自治体には必ず総合計画という中長期的な計画があります。これをお読みになることはすごくお勧めします。結構面白いです。

この町の今の課題は何であり、それにどう対処しようとしているのか、しっかり書き込まれています。それを実は町民・住民の方皆さんが読んだほうがいいんですが、町として何を大事なこととしているのかという課題が見えてきますし。もちろんそれが全部正しいかどうかは分かりません。それぞれの方の感じ方の差がありますので。もうちょっと子育て支援に力を入れたほうがいいのでは、と感じる方もいるでしょうし、高校2校をどうするかって問題はこの町の将来に非常に影響すると思われませんが、優先順位の付け方ですね。

総合計画にはまんべんなく書かれているので漏れは普通ないんです。問題は優先順位の付け方がどうなっているか。それを含めて知るという意味では、総合計画を読まれること、私はお勧めしたいと思います。

あと、人口予測です。人口予測も自治体ごとに作っています。今ですと地方創生戦略も地方自治体は作っています。

さらにいうと、公共施設等管理計画。これからたくさん作ってきた施設をどうやって裁定していこうかという計画。これも全ての自治体を作っています。

こういうのを読んでいくというのをやはりお勧めします。

最後は、これはハードルが高いですが、自治体の予算書です。これは我々も仕事柄、自治体の予算書を読み込みますが、最終的に行政はお金です。金がなければ何もできないと

いうのはすごく厳しい現実なんです。そのお金がどういうふうに分けられているかときちんと町民の方が知っておいたほうがよいと思います。それこそ予算書は読んでいくとなかなかシビアで、例えば私がアドバイザーをした宮城県名取市の予算書には私に払われるギャラが書かれています。10回行って50万円、旅費なし。新幹線で往復して一泊して一回のみ行ったら使い切る、かなり無茶な設定をされていますが、でもそういうことは分かります。それこそ私どもが今回頂戴している金額だって分かりますし、そういうのってすごく大事です。それが妥当なのかも含めて見ていくと。ただ、それをいきなり町民がやるのは難しいと思いますので、だからこそ図書館を活用ですよ。

ここにいる図書館員の方にはプレッシャーかもしれませんが、図書館というのは分からないことを分かるようにしてくれる場所です。ですと遠慮なく、こういうことを知りたいんだけど何か手引きになる本はないか、こういう資料を探してるんだけどないか、どんどん聞いてください。

これは文化的施設のこれからに大きく関わりますが、結局、図書館というのはその町の映し鏡みたいなもので、いい図書館を持てるかどうかは、はっきり言えばその地域の住民レベルによります。瀬戸内市の図書館のレベルが高いのは瀬戸内市民のレベルが高いということですね。それは瀬戸内市の場合、あの図書館を作るに当たって、この10年間ぐらいで整備されてますが、実際の市民の方々の思いからすると30年の思いです。

特に瀬戸内市の「図書館友の会」を中心的にやっている60代のおばさまたちはまさに（酒井委員と）同じ状況です。30年前にお嫁に来た時に、図書館も何もない小さな街で、という彼女たちの思いと勉強が積み重なって、あれだけのものが出来ています。その中で私も話を聞いていて感心したのは、分からないことは図書館に聞く、聞いて聞いて聞いて聞きまくる。それはぜひ遠慮なくやっていただいて良いと思います。もちろん私なんかでもお役に立てるのであればそれでいいですし、行政職員の方々に聞けば行政はちゃんと教えてくれます。逆に聞いていただかないと行政側は何が分かっているのか分からないんですよ。さっきの話じゃないですけど、気持ちを察するとか、こう思っているであろうと思いを見抜くってことは、普通の人にはできません。だから、「これよく分かんないなあ」ということがあったら、この委員会の場でもいいですし、日常の中で図書館に行かれたり、あるいはこの町の規模ですから行政職員の方も顔は分かっているわけで、「これ教えてくださいよ」とどんどん聞いたらよいなと思います。私でも構いませんので分からないことがあったら遠慮なく聞いてください。遠慮なく聞いて、みんなできき合って、みんなできき合ってみてみんながレベルアップしていくと、必ず町の未来は変わります。

（内田委員長）

ありがとうございました。

他にいかがですか？ 今のよろしいですか？

実は、委員会では第1回目に総合振興計画を示してはいただいているんですよ。ただ

それをしっかり読もうとかはなかったわけですが。岡本さんの話を伺いながら私が思いましたのは、単に知識として読むのではないですよ。自分の中にある程度の問題関心意識があってそれを読むとぐぐっと入ってきたり、必要などころが見えてきたり、自分なりの活用の仕方が見えてきたりっていうので、単に学生が知識として理解するっていうのではないですよ。

なので、ワークショップと並行しながら、私たちあるいは住民たちの問題意識が高まってきたところで改めて読んでみよう、くらいの機会があってもいいのかなというように思っております。

他にいかがでしょう？

私から、ワークショップからさらに基本構想を集約していく部分をどうするか。多分そんなに心配するようなことではないよとは思いますが、その辺りで、何か岡本さんなりに経験上ございましたら。

(ARG 岡本)

そうですね。最終回のワークショップ終わった時点で、私たちからこの委員会宛てと教育長宛てに報告書を作らせていただきますので、多分それを見てその中から今回、町民の皆さんで考えたことの中でエッセンスじゃないか、これはちゃんと基本構想の中に書き込んでおかなくちゃいけないんじゃないかということをもとめていきますので、そこから最終的に委員の皆さんでご判断いただいて、ここは入れる、ここはもう少し慎重な議論を要するということを決めていただければよいかと思います。

委員長のご指摘は非常に重要で、ワークショップがガス抜きであったり行政のエクスキューズであったりしてはいけないんですね。皆さんに説明しましたよというフリではないんです、これは。

ですから数多くの方に集まっていたいで出てきたもので、みんなの大きな意思だと言えるものが行政計画に反映していく必要がありますし、みんなの意思とは言えない、まだそこまで振り切れないというものは、これは考えとして移行していただきたいことは、それは無しとするんじゃないかと、「時期尚早」。今は、まだ、この町の決定事項にはできないけど、大事な一つの課題だと思うので、将来へ申し送りはおくという形で記録に残しておくのがいいかと思います。そうするとまた5年後10年後、文化的施設が出来てから10年くらい経つとやはり在り方をもう一度きちんと見直して、よい部分は伸ばしていき、課題になってることは直そうという動きが起きてきます。きっとそういう時に10数年前に語られた、その時は計画に入らなかったことが生きてきて、あの時にみんなが気にしてたことはこういうことなんだというのは見えてくるんじゃないかと思います。ということで報告書をきちんと提出したいと思います。

(内田委員長)



ありがとうございます。

そういう作業を本当は検討委員会でも一緒にやっていくことも必要かと思います。ただまあ、出していただいたものをもう一度、検討委員会の中で、自分たちもワークショップに参加して得た情報や経験をもう一つそこに反映させる形に、第二報告書みたいなのが本来の基本構想になっていくんだろうというふうに考えてはおります。その辺で一生懸命やっていないといけないなあ、という感じですけども。

他に何かございますか？

山本さん、何かありますか？

(山本委員)

ショッピングセンターの上に図書館なんて、どれだけ広い計画が成り立つというのはすごいですね。驚きました。

(ARG 岡本)

そこはこれから具体的にこの町でも考えていかないといけないんですが、どういうふうに財源を作るかと、先ほどのケースは密接に関わってしまっていて、あれは公民連携という方式で、民間企業がお金を出しています。具体的に言うと大和リースという企業が土地を町から借りて、建物を約 20 億円、大和リースが全部出しています。で、20 年間に渡って 2 階部分を町が 10 億円で借りるという形にします。つまり町が自分で整備したら 20 億円くらいかかるものを、民間事業者を整備させて借り受けることによって安く抑えたというやり方ですね。一般財源の公民連携方式、英語で PPP (パブリック・プライベート・パートナーシップ) 方式というんですが、民間企業からすると 1 階部分の売り上げで自分たちが出している事業権をカバーしたい。ショッピングセンター単体で集客できるわけではなくて、2 階に図書館を持つてくることによって爆発的に人が来たというモデルですね。

これは地域ごとにそれぞれやり様があると思います。先ほど紹介した日出町は、実は大分県で唯一、勝ち組自治体です。大分県全自治体が人口減ってるんですが、日出町だけは人口が増えてるんです。なので大和リースさんも非常にシビアに判断して、そういう提案をしてくださった形ですね。

それはまあ、この町にはこの町のやり方があるので、どれかが絶対的に正しいやり方なんてものはないです。それよりは四万十町という町において最もふさわしいやり方、何かオリジナルなものが必ずあるはずで、そこは私もまだ全然見当が付きませんが、それをやっぱりみんなで知恵を出して、できれば将来世代に対する借金を大きくしないようにして、でもあまり慎ましいものにならない、ささやかな贅沢さも味わえるような、落とし所をみんなで探っていきたいですね。

(内田委員長)

ありがとうございます。  
林さん、ございますか？

(林委員)

図書館、美術館、当然この町にふさわしいものが必要だと思いますが、それ以前に、話を聞いていますと、四万十町は四万十川に関わりのある生活文化がかなりありますが、町民にはあまりそのことが、満たされた生活ですので、関心が少ない。我々の先人たちが苦勞して古代から江戸時代に渡って作ってこられた現在があるわけですから、そういったことも一つの大事な文化遺産ですが、あまり関心が少ない。

住民に関心を持ってもらいたいことがたくさん、文化に関係することでありまして、それは四万十町で生活する上で知っていなくてはいけないことですが、知らなくても生活はできます。しかしやっぱり人間として生まれ育って生活を進める上には、それも必要ですよ。

それから地域に貢献してきた人物、そういったものものことも考えていきますと次から次へありますし、昔から伝わってきました郷土芸もほとんど人口が減り、子供たちがいなくなって踊りというようなものも含めて、無くなることはできない状況になっておりまして、それが一回途切れますとなかなか再建が難しいことがあります。

このワークショップにはそういった地域の魂も入れて、残していくべき課題があるんじゃないかということも考えながら、今日のお話を聞かせていただきましたが、そういうことも関心を持っていただくようなワークショップができればいいなと思っております。

(ARG 岡本)

非常にその通りで、ちょっと固い言い方をしますと、最近自治体の中で注目されている考え方に「シビックプライド」という言葉があります。シビック＝市民、プライド＝誇りですね。日本風の言い方をすると郷土愛というのかもしれませんが、郷土愛と言うとちょっと古めかしい言い方なのでシビックプライドという言い方なのかもしれません。

シビックプライドというのはつまり自分が住んでいる、生まれ育った町に対して誇りを持つことです。

例えば、私は横浜で生まれ育ちましたが、横浜のおしゃれな港町・横浜ではなく、横浜の最も南にある金沢文庫という地域で生まれ育ちました。私にとっては金沢文庫という土地で生まれ育ったことは非常に誇りです。

特にこの仕事をしていて有難いのは、図書館に詳しい方はお分かりだと思いますが、金沢文庫は名前の通りもともと図書館なんです。鎌倉幕府の北条氏の一族で、北条実時という方が中世に初めて図書館を作ったんですね。足利学校と金沢文庫という二大図書館でして、金沢文庫というのは今でも神奈川県施設として存続しています。

私が歴史好きだったこともあります。自分が生まれ育った町、正直どこにでもあるよ

うな取るに足らないベットタウンが私の生まれ育った地域ですが、歴史を見た時に鎌倉から続くだけのこれだけの歴史があるんだと知ったこと、そして金沢市の最後の方は、北条氏が滅びる最後の時に、『太平記』の前半のヒーローなんですね。彼が華々しく戦死するというのが前半の悲劇の物語の一つですが、それを長じて読む時にすごく感動します。つまり私が生まれ育った地域はまさに偉大な先人たちがいて、その土地が自分には脈々と続いてるんだということです。そういったことをきちんと考えていくとですね、ありがちな「東京行きたいな」「大阪がいいな」という発想にならないんです。

これは本当に各地域で頑張らなきゃいけないところで、それをやらないから結局みんな「東京さ行くだ」になっちゃう。これは横浜の人がよく言うんですが、神奈川県民もそうでしょう。神奈川で生まれ育つと東京に行く意味を対して感じなくて、ちゃんとそう育ちます。ですから神奈川人は基本的に神奈川から出ない。東京に住むのをアホだと思っている。神奈川は東京に近いからって言える部分もちろんありますが、でもこの地域だって、じゃあ高知市を見てればいいか、ではないと思います。

この町にしかない何かがあるはずで、それは例えば谷干城かもしれませんし、昨日ちょうど事務局に教えていただきましたが、この界限にも、名前は残っていない、有名ではないけれど幕末維新期に活躍された様々な先人の方々がいる。

そういったところをこれからきちんと掘り起こしていく。すごく大事だと思います。これはぜひ日常の取り組みの中で、私も協力していきたいと思いますが、ハコが出来てからやると遅いんですよ。今からぜひやってみましょう。地域を語る上で欠かせない事柄というのは、幕末維新期 150 年前ってのも、あと 50 年経ったらもう調べようがなくなりますから、今の内にどんどん調べていく。どんな人たちが私たちの生活に、血は繋がってなくても、少なくともこの同じ道を歩いた人たちがどんなことをしたのかきちんと押さえていく、それを文化的施設の中にきちんと取り込んでいくのが大事かと思っています。

実際に下吹越が担当した西ノ島町でもそれをやりました、地域の古老の方々、例えば隠岐の鍛冶で非常に高名な方がいらっしゃるんですが跡取りがいなくて、その方が亡くなったら隠岐の刃物の歴史が途絶えます。その方にインタビューをして、匠としての技と記録のヒアリングをして、実際に図書館に、その方の作品と共に飾ってあります。

この地域にも様々な名人の方が、実は内心一目置く方が、この地域における有名人・先達がたくさんいらっしゃると思うので、そういうものもきちんと記録して残していきたいですね。モノが記録として残っていると、あそこにいらっしゃるお子様たちが、大きくなった時、たぶんその先達はもう亡くなっていますが、でも「すごい人が私たちの町にいたんだ」と知っていると、自分も負けないように頑張っていこうと、良いサイクルが作れるとよいなと思います。

私は四万十に来たのは何回目かですが、面白いですよ？ 非常に色々なものがあって、可能性をひしと感ずるので。決して谷干城だけではない。もっともっと色んな可能性を皆さんと一緒に探していければと思います。

(刈谷委員)

先ほどのお話と少し関連するかと思いますが、四万十町はすごく広い地域なので、地域が重なって合併している所なので、それこそ海もあれば山もあるというかなり距離的に離れているような地域で、図書館が建つ場所を街歩きして、窪川を歩いたあとに、例えば別の地域に住んでいる方は、施設が出来たあとにどういうふうに「わたしごと」に、ちょっと離れてて普段はあまり来ないような地域に図書館が出来たとして、どういうふうに「私事」として捉えられるのか、利用者としてどういうふうな関わり方をしていくかを、さっきの日出町のような事例が他にあったら教えていただきたいです。

(ARG 岡本)

我々が仕事をしていて難しさを感じるのは合併自治体の仕事が非常に難しいですね。

特に四万十の場合は、露骨に言えば2町1村ある力関係をやや明瞭に持っていて、これ明らかに窪川がどう見ても中心地になっていると言ってよいと思います。

ただ、この中でどうバランスを取っていくのかは非常に難しく、私も前回言いましたが、「十和ってこんなに遠いのか」「もはや宇和島じゃん」と思いました。実際に伺ったら買い物は宇和島に行かれる方が多いということで、窪川よりもむしろ宇和島のほうが近いという感じる人たちはよくいるというのはよく分かります。

一方で一つの自治体なので、大事にしないといけないことは「みんなに対してフェアである」ということですよね。少なくとも十和の方が「十和は損している」と思ったら町は終わってしまいますし、そうなることだけは絶対に避けなければいけない。その中で現実的に図書館を建てるとしたら今の窪川の中、と考えた時に、これから気にしなきゃいけないのは「最も立場の弱い人にとって最も使いやすいって何だろう？」って考える。窪川周辺の人たちが使いやすいのは当たり前です。でも十和の人が来たくなるって何だ？ ってことをきちんと考えていく。例えば十和地域で子育て中のお父さんお母さんであれば、窪川に出来る文化的施設に来たら、親が子供を預けて、自分自身の時間を過ごせる図書館・美術館はどうでしょう？

これは私がさっき言った常識や固定観念を崩してくって話に似ていますが、例えば図書館を作る上のセオリーでこういう考え方があります。「児童図書コーナーの近くには子育て中のお父さんお母さんが読みたそうな本を置いておく」。これ一つのセオリーで、別の図書館に行く時に見ていただきたいですが必ずそうになっています。料理や旅行の本が児童書の近くに置かれるというのは結構ある話なんです。でもそれ、私はちょっとおかしいと思っていて、それ結局、子どもを抱っこしてあやしながら、あるいは子供が本を読んで座って寝転んでいるところを、親が注意して見ながら自分の本を見るということです。それは気が利いているようで、私はだめだと思っていて、やっぱりやるべきは子育て中の方々が「子供を託して自分の時間を過ごせる」、そういう文化的施設があるべきだろうと思います。これは四万十町に限ってではなくてどこでもそうですが、もしそういった機能が実

現すれば、例えば十和地区にお嫁に来ている。多分あの環境だとちょっと姑さんや近隣の目が厳しいとか、憩いの場がない、息抜きができない、息抜きするのは自分の車の中！というのが容易に想定できるわけですが、そういう時にここに来て、子供は預けて安心して、預けるのは近隣のベテランパパ・ママたちがやってくれて、いいよあなたは一日ここでんびり過ごせば、ということができるような所であれば十和の方は来るようになります。

それが、一番の弱者に対して配慮を徹底的にしていけば、比較的強者であるこの近隣の方々には当然めっちゃくちゃ便利な施設になろうかと思えます。

そういった取り組みがきちんとできている自治体が他にどれくらいあるかというと、最強は瀬戸内市民図書館ですね。瀬戸内市民図書館は作り方が丁寧で、島田学さんが滋賀県から岡山県に移住してきて、一番最初にやったのは移動図書館という車を走らせることです。それによって最も図書館に行きにくい人たちの所に図書館というサービス・体系を届けるようにしたわけですね。

あれは非常に巧みなやり方で、実は同じことを 50 年以上前にやった図書館があります。高知県立図書館です。高知県は県立も市立も日本において燦然と輝く存在なんです、実は。それはおそらく高知という土地柄、厳しさというものもあったからこそ、大きな文化が開花したこともあるんでしょうが、そういった伝統に学びながらやっていこうというものが出てくるんじゃないかと思えます。

あともう一個、弱者に配慮するという意味で言うと、地方で図書館を作る時にどうしても議論になるのが、駐車場の台数です。実はさっき見ていただいた富山市の図書館は駐車場ゼロです。50 台 100 台作ったところで駐車場はどうせ間に合わないんで、民間駐車場を使ってくださいというふうにして駐車場 0 台にしました。開館して 3 年経つ今でもクレームのトップは駐車場がないことです。

ただいつもこういう時に、地域の人たちから見れば我々は東京から来ている人たちなので、必ず「東京の人は地方における車の大事さを分かっていない」と言われますが、違います。車がなければいけない社会を作るから地方は衰退するんです。

車が使えない人のことを考えてほしいんですね。それは誰か？ 18 歳以下の人ですよ。

そして今、大きな問題ですが、シニアに免許を返上させようという動きが強くなっています。このまま行くとシニアの免許は再免許制度になりかねない勢いです。この地域にもいると思いますが、運転免許を手放さざるをえないシニアの方々、この人たちこそ大きな弱者であって、この人たちを前提に考えなきゃいけないんです。

特に 18 歳以下の方々には、親の運転、誰かに送ってもらわなきゃ図書館に行けない町に、住み続けるわけがないんですよ。そりゃ高知に出ます。

だから「車があればよし」という発想になっちゃうのはまずいです。車は大事ですが、車を運転できない人のことを軸に考えないと、まさにみんなにとって使いやすくないんです。

究極的に言うと、十和地区で連れ合いを亡くして独居老人をしてる方が、タクシーを使わず電車を使わず、でも何らかの手でここに送迎してもらって、気を遣わずに過ごして、帰りたくなったら誰かが送って行ってあげると。そういった仕組みまで作り上げられると、オープンした時に皆さんが想像しないほどめっちゃくちゃ人が来ます。今は関心ないと思っている方々が、その時になると、実はこれを前からそう思っていたんだ、大事だと思っていたんだと言ってくれるので。

西ノ島だって最初は怪文書をばら撒かれました。「老人ホームのほうが大切だ」みたいな、典型的な島の構造でしたが、手書きの怪文書だったので誰が書いたか分かるんですね。島のなほんわかさを感じましたけれど、結果的に今になれば「そんなもの要らね」と言っていたおじちゃんたちが喜んで図書館に来てくれるようになるので、そういった声なき声に耳を傾けていけば、皆様が希望されるような図書館と未来は出来ると思います。

(酒井委員)

すみません。色々頭を巡ってまとめるのがあれなんですけど、詰まる所、弱者の声が聞かれないという自治体は滅びるといふことにはなりますので、夕張市も然りだと思いますが、それは関係性の貧困から来ていると思います。

年代によって大事にしているものがお互い分からないから、私事にならないから、使いにくいものになるということもあります。

もう一つ、瀬戸内市は関係性の貧困を解消するために、勝ち組ではきつとなくて、地道に市民活動があると思いますが、「あれ、これはいいな」と思われている取り組みがあったら教えていただきたいのと、以前に先生がおっしゃった高校生の場合、文化的施設というか、こちらの子は文化的なものに接する機会があまりにも無さ過ぎて、それこそ都会に行けば岡本さんやそういう方に出会えて、そういう世界があるんだと思って、50年後の図書館を想像して、また膨らむ子も出てくるかもしれません。私たちの場合、全然、電子図書のレベルは25年後にどのくらい可能なのか想像もつかないわけで。新しく出来る図書館では、そういった新しい情報も常に取り入れてもらわないと困るかなという点があるので、そういった場合はやはり岡本さんたちに相談して、然るべき方を入れたほうがいいのかなと思います。その2点を教えていただけたら。

(ARG 岡本)

1点目は瀬戸内を見てると地道な活動に尽きますね。

西ノ島の図書館オープンの時、島田学さんに講演していただきましたが、島田さんは時々この話をされるんですが、島田さんにとっては二つ目の図書館ですね、滋賀県永源寺町で図書館を作った時に、初日に全然人来なくて、本当に心が折れそうだったと。でも段々と。

これ地方でよくある話ですけど、農業とかやってるおじいちゃんが「俺は本なんか読ま

ない。だから図書館要らん」という、本当によくあった話なんです。でも実際聞いてみると、本に対する固定観念があって、本＝小説だとずっと思ってたんですね。農業をやられてる方は本を読みます。私の祖父は農民でしたが、ものすごい勉強家でした。長野県に朝鮮人参栽培を根付かせたということで長野県農業界では超有名人らしいです。つまり農業書を読むことに関しては、尋常小学校しか出てなかったはずですが、ものすごい博学な人で、やっぱり仕事してる人は本を読みます。ならそのアプローチで島田さんも、いやいやそう言わずに、例えばこういう本あるんですよ、と。あ、だったら読む、と。そうやって変わり出した。

ということでここは地道なアプローチしか本当ないと思います。一朝一夕でぱーんと変わりませんし、話題性があればなんとかなるかっていうとないんですね。

数年前に佐賀県武雄市が TSUTAYA と組んでスターバックスの入った図書館を作りました。でも武雄市の人口ずっと減ってます。それって結局、一発で打開するみたいな考えを持つとあんなっちゃう。そこを本当に地道にこつこつこつこつしかなかろうと思います。

ただ、その中で戦略的にやるということはできます。色々な世代の方がいる所で恐縮ですが、そこを変えていくのにある意味確実なのは、徹底的に若い人の声を重視することです。若者がこの町に対して「この町は変わる」「この町に期待できる」と思ったら町は変わります。正直、これしかないんです。申し訳ないですが、シニアの方より若者です。この町、若者がいなくなったらどうあっても 30 年後には終わるわけです。

今この町で生きている若者たちが何を整えればこの町で暮らしていってくれるのか。一回、高知市に出てもいいですし東京や大阪に出ても構いませんが、子育て期になった時に、自分が育ててもらった環境を我が子に与えたいと思う心理は普通、誰にだって発生します。そういった気持ちになれるような、若者たちの声をとにかくたくさん聞く。もちろん若者におもねる必要は全然ないです。ないんですが、若者たちの考えを聞いて、大人が責任を持って判断・決定するということをしていくと、若い子たちは本当に変わってきます。

私たちが今関わっている鳥取県智頭町という人口 7000 人くらいの町では、新図書館を作っていますが、基本的に決定主体は全部中学生です。悪いですがシニアの方々には、ワークショップには来ていただけてますが、自分がバリバリしゃべる必要はない、若者の話を聞く、そして若者の至らない部分、足りない部分にベテランの知恵を発揮してくださいと、この 2 年間くらいコミュニケーションして非常に上手く行っています。若い子たちがシニアと話したがるらないのはお説教されるからです。だから智頭町ではお説教禁止にしています。むしろ若い子がしゃべったことに対して老賢者としてアドバイスしてください。これがすごく上手く行っていて、去年やった智頭町のワークショップは、下は 0 歳、上は 90 歳、4 世代交流くらいの感じでやりました。

そういうのは、どうやって作っていくかの一つとして言えるんですが、若者の声に積極的に耳を傾けて、でも決断は大人が責任を取る。その背中を見せていくと、若い人たちは

意識が変わりますね。

あともう一点で言いますと、そういった立場の話ができる人をどこかのタイミングで入れていく必要があると思いますが、一つ考えていただきたいのは、なるべく町内で探すことです。得てして、外から引っ張ってあげればいいのかというのがありますが、外から引っ張ってきて意味があるのは5年くらいで辞めてくれる人を採る時だけです。

つまり図書館を起ち上げる時の館長を町の正規職員として雇用したら、30歳だったら30年間、町がその人を食わせることになるわけです。それは多分、四万十町の財政からしたらかなり難しいことだと思います。だから外部から傭兵さんみたいに連れてくることは、5年10年やって定年していただく人しか採れないんです。そういう人は必要ですが、それは野球やサッカーで言うところの外国人選手みたいなものなんです。核となるものはこの町でできれば探したほうがいいですし、今この町に住んでなくても、この町出身で、どこかで活躍している人、必ずいるはず。むしろこれをきっかけに町に帰ってきてもらう。あるいは意気込んでこの町にIターンしていただく人がいいと思いますが、なるべく人は自前で育てるよう意識したほうがいいと思います。

実際、瀬戸内市は、島田館長は外部から引っ張って来られましたけど、彼もあと5年で定年です。でも島田さんの跡を継ぐ方がおそらく二人決まっています、二代目・三代目の館長になる人はもともといた職員ですね。島田さんが育てた。だから島田さんが5年後に定年しても、そのあと10年間守る館長がいる、さらにそのあと10年間守る館長がいる。島田さんたちのすごいところはそこなんです。図書館として25年レベルで人事をもう考えている。そうやって人を採っている。採るだけじゃなく、今いる人を大事に育てている。

町民の皆さんが外から引っ張ってあげればいいのかと言いきると、役場からするとそうせざるをえなくなるんです。でも慎重に見たほうがいいのは、四万十町役場の中に秘めたる思いを持っている優秀な職員がいる可能性があり、そういう人の思いをスルーして外から引っ張ってくるとその人はやる気をなくす。それは我々、今までたくさん見てきましたが、本当に良くない。中にこそ優れた人材はいて、私たちに目がないからその人たちに気づけてないだけなんです。

やっぱりこの町のことを分かった人にやってもらうのがいいですよ。島田さんも最初は瀬戸内市を理解するのにかなり苦労されてましたからね。

そういう意味では、外からの人路線も大事ですが、それが全てだと思わないほうがいいと思います。大事なものは、この事業や取り組みに命懸けで頑張ってくれる人であれば誰だっていい、でもできればそれが地元で埋もれちゃってる人、みんなで気づいてない人を発掘するというふうになんか人を大事にしていくほうがいいと思います。

(内田委員長)

ありがとうございました。

時間は少し過ぎていますがお時間を頂いたのは、ワークショップというどうしても方



法論というイメージが強いんです。それだけではだめなんですよ。どういう視点が大事なのか、視点と方法の両方、むしろ視点をどう共有するかということで、定刻を過ぎていますがご質問を出していただく時間を取らせていただきました。

おそらくまだまだ大事な視点、あるいはワークショップをしながら見えてくる視点がたくさんあると思います。ワークショップはまさに学習の場でありまして、そこからまた別の学習を試みようという発展していくような、毎回参加者が増えていくようなワークショップが一番成功ですよ。そういうふうにしていきたいと感じております。

岡本さん、ありがとうございました。

それではこれで閉会したいと思います。

## (2) 街歩きワークショップ